一　　般

平成29年度

愛知高等学校入学試験問題

国　　語

注　意

1．問題は一・二・三があります。

2．問題の内容についての質問には応じません。

印刷のわからないところがある場合には、静かに手をあげて監督の先生の指示に従いなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

字数制限がある記述問題においては、句読点は字数に数えることとします。

氏名、受験番号を書き落とさないように注意し、解答し終わったら必ず裏がえして机の上に置きなさい。

4．解答用紙だけを提出し、問題用紙は持ち帰ってよろしい。

一

次の文章を読んで後の問に答えなさい。

1 かつて日本人の生活にかかわる大半の事柄は、「床に坐る」ことを前提に組み立てられてきた。飲食にかかわる日常の姿勢にはじまり、人と挨拶するときの作法から、芸事を嗜むときの基本の身構えなど、日本の文化を知ろうとするときに、「床に坐る」ことを抜きにしては、①その懐深くには入ることができない。それも書物の情報や博物館の陳列品などを見聞きするばかりでなく、身をもって日本を堪能しようとするのであれば尚更である。

2 床に坐った目線から事物を眺めると、直立して※俯瞰したときとは世界の見え方がちがってくる。たとえばカメラで椅子を撮影するときに、造形を綺麗に見せるのであれば「低いアングルから撮る」という原則がある。庭の自然や人物を撮るにしても、低い視点から眺めるようにして、フィルムに収める。そうした手法を一貫して用いた映画作家に、小津安二郎がいることはあまりにも有名だ。ローポジションから写し撮られる世界には、何よりも画面に「奥行き」と「陰影」が深くあらわれる。アングルと距離感のちがいで、世界の見え方がわれわれの知る日常とは別次元の豊かさをあらわすことさえある。

3 畳の上に悠然と坐っていると、かつての日本人がどのように世界を眺め、人と人との関係をどのように和ませ、身の回りの諸々の事柄を愛おしむように秩序立ててきた様子が、自分のからだでも感じ取ることができそうな気がする。端坐でかしこまるのもいいけれど、足を崩して寛ぐことも大切な作法のひとつであることを知るときに、古代・中世の人々の感覚を、よりリアルに推し量ることができるような気もする。

4 ただ地面や床に腰を下ろすだけならば、日本人に限らず誰もが行う休息の動作であるにちがいない。欧米のように、床に坐ることを嫌うような価値観をもった社会でもない限り、日頃から直立している人間が、足腰を休めるために「坐る」ということは、ごく自然なあたりまえの行為である。その坐り方に一定の合理的な方法を考え出し、自分だけでなく人にも伝え、社会の全体にまでそのやり方を普及させるようなことに至っているとすれば、②「坐の作法」はその社会の文化を大本で支える役割を担っているとも言えるだろう。

（ 中 略 ）

5 床に坐ることを基本としてきた日本の生活文化は、中世の頃に定められた禅の作法に大きな影響を受けているのだが、それ以前の宮廷文化にも坐を大事にする思想はあって、たとえば歌人の藤原定家の歌論書とされる『毎月抄』には、歌を詠むときの嗜みについて、「まず坐を正しくしなくては歌を詠んではならない」と書かれている。

6 普段、立ったり、寝っ転がったり、好き勝手な姿勢で歌を詠んでいると、正式な歌会の席で要領がちがってしまって、まったく詠めなくなってしまう。したがって、「くれぐれも坐を正さないでは歌を詠んではならない」と、かつて自分も父である俊成から厳しく戒められたことを告白している。良い歌をひねり出そうと懸命に考えると、心が乱れてますます詠めなくなってしまうことがあり、そんなときにも坐を正していれば、おのずと詩の心が澄んできて、言葉が自然と浮かんでくる、ということだろう。

7 Ⅰ 、当時の歌人にとっての「正しい坐」とは、現代の「正坐」ではない。※第二章でみた通り、定家が活躍していた（ A ）に正坐をしている日本人はほとんどいなかった。当時の歌人にとっての「正しい坐」とは膝に短冊を置いて文台代わりに用いることもできる「歌膝」の姿勢のことを言っているにちがいない。 Ⅱ 、中世の歌人は「立て膝」に坐って歌の心を研ぎすましていたことになる。

8 定家にしたがえば、優れた和歌が生まれるためには心が優れていなければならず、優れた心は歌人の身体とひとつのものである。言葉を換えて言うならば、③和歌の世界を捉える心は「坐」によってこそ養われる、と言うこともできる。

9 こうした「言葉」と「心」と「身体」のつながりに、明確な思想を与えたのは中世の禅僧たちであり、曹洞宗の開祖である道元も、参禅の体験から見えた世界を「本来の面目」と題した和歌に表している。

春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪冴えて※冷しかりけり

10 あたりまえに見えている「自然」の姿が、このような素朴な言葉で、あらためて和歌の抑揚にのせて発せられるとき、詠み人の目には、私たちの見たこともないような輝きを放つ世界が映し出されていたのかも知れない。

11 「禅（ディヤーナ）」の意味する「聖なる静けさ」は、その感覚が生活のすべてに連続するよう修行者たちを導いたであろう。「坐」を整えることを中心として衣・食・住のひとつひとつを丁寧に組み立てるとき、日常生活と宗教的修養と芸術的創作とを隔てる境界はなくなり、人間の営みすべてと「聖なるもの」とが交わる場として浄化され、身体も言葉も空間も、それぞれが内に秘めたる本来の輝きを放つようになるだろう。

12 このようにして※開悟者たちは、ただ只管坐ることで身につけた見識をもとに、坐の周辺に広がるあらゆる事柄を、④力強い形式へと秩序立てていった。Ⅲ「如何に坐るか」という修行の実践から、※座蒲の敷き方が定まり、腰を落ち着ける帯の締め方や、開いた膝をゆったり隠すキモノの身幅もおのずと定まったにちがいない。その瞑想の深まりから生まれた「澄んだ静けさ」、すなわち「禅」が持続するように、食事の作法や立居振舞いにも相応しい秩序が生まれ、歩幅に合った畳の寸法や身の丈に合った柱の高さ、心を落ち着けさせる天井の低さなど、空間の全体に明確な尺度が与えられただろう。これら「坐」を中心にして組み立てられた生活空間は、一般社会の文化を基盤において支える形式にまで高められ、庶民の日常へと浸透していくこととなる。

13 かくして日本人にとっての「坐」は、生活のあり方を定め、人と交わる身構えを教え、「身体」と「自然」とのこの上ない調和のなかで、人間の生きる道を示していっただろう。歴史の折々に⑤椅子やテーブルが渡来したが、一時期の流行によっては容易に変更することのないほどの「坐の文化様式」が完成されていたために、一〇〇〇年以上の永きにわたって床坐の生活が保たれてきた。

14 その坐り方はわれわれ現代人が知るような⑥窮屈なものばかりではなく、「安坐」や「立て膝」、「※半跏趺坐」など、さまざまな状況に応じた坐り方が時々の作法にしたがって形づくられ、「崩しの自由」を許容することまでもが作法の内に含まれていた。座敷に上がり、畳に腰を下ろすとき、何となく打ち解けることのできる感覚が、私たち現代人の身体にわずかでも残っているとするならば、それも古来伝え継がれてきた身体文化の名残である。

15 社会学者のピエール・ブルデューは、人間が人間であることの条件を「文化を身につけることである」とした。日本文化の根底を形づくってきた「身体技法」の多くは、家屋や道具の意匠のなかに、あるいは伝統芸能の「型」のなかに、いまでも伝承されている。少し注意して目を向けてみると、私たちに身近な日常のなかにも、文化を再生させる種子は無数に眠っているのである。

（矢田部英正『日本人の坐り方』による）

※設問の都合で本文の段落に 1 ～ 15 の番号を付け、一部省略・改変しています。

注

俯瞰……高いところから広く見渡すこと。
第二章……筆者は本文より前の部分で正坐について述べている。
冷しかりけり……すがすがしいことだ。
開悟者……悟りを開くために仏道修行をしている者。
座蒲……坐禅のときに用いる座布団。
半跏趺坐……左足を右ももの上にのせるだけという坐禅の坐り方。

【問一】空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る接続語として最も適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。（同じ記号を二度使ってはいけません。）

ア　ただし　　イ　たしかに　　ウ　むしろ　　エ　つまり
オ　もちろん　　カ　だとすると

【問二】空欄（　A　）に入る語として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　奈良時代　　イ　平安時代　　ウ　鎌倉時代　　エ　室町時代
オ　江戸時代

【問三】ある段落の冒頭から「このように『坐』は文学の世界とも密接につながっていて、とくに和歌の言葉を生み出す感覚的な素地をつくる上で大事にされてきた。」という文が抜けています。段落[1]～[9]のうちどの段落の冒頭に入れるのが適切ですか。段落番号を答えなさい。

【問四】傍線部①「その懐深くには入ることができない」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　日本の文化に興味や関心を持つことはできないということ。
イ　日本の文化の本質を十分に理解することができないということ。
ウ　日本の文化を大切にする人として認められないということ。
エ　日本人としてのあり方を学ぶことはできないということ。
オ　日本人の生活様式の変化に対応することができないということ。

【問五】傍線部②「『坐の作法』はその社会の文化を大本で支える役割を担っているとも言える」のはなぜですか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「坐の作法」を社会全体に普及させることによって、それが人間にとって合理的な休息であることが理解できるから。
イ「坐の作法」のように生活に密着した作法を整えることで、社会全体の法や制度が成立しているから。
ウ「坐の作法」は日本社会での規範意識を統制するものであり、日本人としての姿勢を秩序立てるものであるから。
エ「坐の作法」を体得することによって、日本人が世界をどのように見ていたのかがわかるようになるから。
オ「坐の作法」は人間本来の行為を理にかなった形で創造したものであり、それが日本の社会全体に浸透しているから。

【問六】傍線部③「和歌の世界を捉える心は『坐』によってこそ養われる」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「坐」が正されていても、和歌を詠むことは難しいということ。
イ「坐」に関する和歌がいつの時代も、多く読まれたということ。
ウ「坐」を正せば心が澄んできて、言葉が思い浮かぶということ。
エ「坐」を正すことと、和歌を詠むことは同義であるということ。
オ「坐」は和歌の内容によって、正しい姿勢が異なるということ。

【問七】傍線部④「力強い形式」とありますが、筆者が「力強い形式」と認めるものとして**適切でないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　着物の寸法　　イ　人との交流の仕方　　ウ　食事の作法
エ　坐禅の時間　　オ　建物の構造

【問八】傍線部⑤「椅子やテーブル」はどのような社会の象徴ですか。それが最もよく分かる表現を、本文中から二十五文字以上三十文字以内で抜き出し、初めと終わりの四文字を答えなさい。

【問九】傍線部⑥「窮屈なもの」の本文中での具体例として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　歌膝　　イ　正坐　　ウ　安坐　　エ　半跏趺坐　　オ　立て膝

【問十】筆者は本文の中でいくつかの例を挙げて論じています。その内容の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　小津安二郎の例は、低い視点から世界を眺めることで立って見るときより距離感や明暗の違いが明確になり、日常の別の表情が見え

てくることを示しており、そこから歴史をも感じ取っている。

イ　藤原定家の例は、中世以前の日本において坐がどれだけ重要視されていたかを、和歌との関係性から示しており、和歌を詠む文化がどのように形成されたかを歴史的側面から説明している。

ウ　藤原俊成の例は、『毎月抄』の内容が先代から受け継がれている作法であることを示しており、藤原家が和歌の世界でどのように大成し、どのような役割を果たしたかを説明している。

エ　道元の例は、日常生活と宗教的修養と芸術的創作とを隔てる境界をなくすことで、四季折々の自然が持つ輝きを改めて認識することができ、坐禅のありようが変わってきたことを示している。

オ　ピエール・ブルデューの例は、人間の定義を示すためのものであり、文化の移り変わりによって変化しつつある「坐」の必要性とその意味を、社会学的に考察する契機を読者に与えている。

二

次の文章は、髙樹のぶ子『光抱く友よ』の一部である。これを読んで後の問に答えなさい。

高校二年生の相馬涼子は、担任の英語教師・三島良介にあこがれの気持ちを抱いていたが、ある日の放課後、三島が同じクラスの松尾勝美を厳しく叱責している場面を目撃する。

父親を持たず、酒で体を病んだ母親に代わって実家の店を切り盛りしていた松尾は学校も休みがちで、三島は母親あての手紙を松尾に持たせていた。松尾が母親からの返事を三島に渡したところ、三島は激しく松尾を責めた。

「こんな子供みたいな字を書く大人がいるかって言うわけよ。うちが母親に手紙を渡さんで小細工をしたろうって、あの三島の馬鹿が」と、すでに何かを諦めたように力を抜いた声でつけ加えたのだが、三島の馬鹿にも、怒りというより投げやりな響きしかない。

涼子は、①すみませんのひとこと以外依怙地なまでに発しなかった松尾を思い出していた。ちゃんと説明をしたのかと怒ったように尋ねると、松尾は肩と、それに続く首から顎を小さく震わせて笑いだした。

「こういうことはね、諦めた方がはなしは簡単なんよ、だってねえ、これ、どう見たってあんた、子供の字じゃもんね、言い訳しようがなかろう。酔うとこんなもんじゃありませんよ、これでもね、上々の出来、たったこれだけ書かせるのに、うちがどれだけ苦労したと思う」と熱いものでもつまむ手つきで便箋を風に泳がせる。

酒を飲む女についての涼子の想像には限界があって、こういう文字を綴る女としてうまく像を結ばない。むしろ精神を患っていると言われた方が納得しやすい。

「あんた、適当でええから、うちの母親の代りに手紙書いてくれん、それなら三島も納得する」

返事をする余裕もなく、どうしてこんなことに、と、三島への憤りが胃のあたりまでせり上がってくる。涼子が階段の踊り場に近づく以前の、一通の手紙をめぐる三島と松尾のやりとりが、見てきたことのように現われた。三島が手紙を封筒ごと握りつぶし松尾の足元に叩きつけて怒鳴っている。蒼い、能面のような松尾の顔が、かなしむでも怒るでもなく、じっと三島に向けられている。三島はいよいよ※激昂していく。その場面は、涼子の頭の中の昏い踊り場を突き破り、激しい言葉となっていっきに溢れ出した。

「うちが三島先生に言うたげるよ、この手紙をつきつけて、目えかっと開いてよく見ろちゅうて言うたげる。他の先生の前でも構わん、教師としてこんな邪推をして生徒を傷つけることが赦されるかどうか……うちは聞いてて我慢ならんようになってきた。三島先生がすべてを認めて松尾さんに謝罪するまで、うちは我慢ならん」

女子生徒に声を掛けられ「ヨオ」と平たい唇の端を反らせて応える三島の顔が醜く歪んでくる。ここまで何となくひきずってきた三島への気持が、たったいまの自分の言葉で断ち切られていくのがわかる。半年ものあいだ心を占めていた男がこんなにもあっけなく、と思うと、自分というものが急にいい加減に感じられ、摑まるものもない心もちではある

が、それでいて、体の深い部分に冷気が一筋流れこんできたような清々しさもなくはない。

少しあっけなさすぎる、と涼子はまた用心しいしい②三島の顔を引っぱり出し、そっと触ってみる。

もはやこの気持は恋愛なんかではない。自分にそう言いきってみると、③暗い森をくぐって夜明けの山頂に立ったような心地がやってきた。きっと首をもち上げ※胸郭いっぱいに息を吸いこむと、ひとつふたつ急に年をとった気さえした。自分がたったいま知った事実を携えて、相手が誰であれ体ごとぶつかっていけそうな勇気が湧いたのには、涼子自身驚いていた。三島にだって堂々と向かっていける、とその場面を想像した。これまで何百回となく三島とふたりきりになる状態を思い描いてきたが、いつも赤面しながらはっと我に帰るといった繰り返しばかりで、彼に立ち向かう自分の姿など考えられなかった。三島はあってはならない間違いを犯し、それに気づいてさえいない。

黙っていた松尾がいきなり涼子の腕を摑んだ。前に立ちはだかり、一語一語を切るように低い声で言った。

「それだけは許さんよ、口が裂けても本当のことを言うたら許さんよ、三島だけでなくうちの母親にも言わんで。ええね、言わんて約束してくれるね、もしこの手紙のことを誰かに喋ったら……」

松尾は顔をそむけ、ふいの混乱を鎮めるように背を向ける。

④「特にあのひとの耳に入ったら、あんた、ただじゃすまないよ」

威すように言ったかと思うとすこし経って⑤「あのひとだけには、知らせとうない」と今度は、細い、崖っぷちに立たされたようなさしせまった声でつけ加えたのだった。

涼子は［ I ］を殺して松尾の背を見つめた。A白刃を構えたような凄みと、Bほんのひと突きで転がってしまいそうな脆い気配の両方が、涼子を金縛りの状態にしていた。

木材の切口がほの白い円形をこちらに向けて並んでいる、整然とした風景の中で立ち止まった松尾は、涼子に振り向き、

「あんたにわかってもらおうとは思わんけど、人間には辛抱できる辛さと、できん辛さがあるんよね」

と言うと、後方からの風で八方に脹らむ髪の中の、Cいまにも泣き崩れそうな口のあたりに微かなふるえを浮かべ、しかし目には依然としてD射抜くような凄みも残して、涼子を睨むように見る。

⑥胸の内側に線香の火でも押し当てられたような痛みを覚えた。学校中から［ II ］眼視されるより、三島に罵倒されるより辛いものが、涼子の奥深くまで、ゆっくりと伝わってくるのだった。

あんたにはわからんよね、とまた小さく鋭い声が届き、積み上げた杉材の隙間から隙間を、笛に似たやわらかな音をたてて風が抜けていった。

何度も書き直し、結局短い手紙になった。

――［ III ］ごめん下さいませ。勝美より事情をきき、また先生よりの御手紙を拝見し、娘のことに関し余りに無知であったことを恥じる次第でございます。そのうえ先日は、娘が先生に対し失礼なことを致しましたとか、充分反省をしている様子、どうぞ御容赦下さいませ。

私が病いがちで看病を頼み、また家事のことも任せきりで、学業をおろそかにさせておりました。これからは母と子で相談して参りたいと思います。

御目にかかって御挨拶をと常々考えておりますものの外出が思うにまかせず、また御越し頂いても狭いところに臥せっておりますのが心苦しく、どうか母親の気持を御察し頂き、勝美のこと、よろしく御願い申し上げます。

松尾千枝

これでいいものかどうかを、父親の卓治にでも見てもらいたいぐらいだった。生まれて初めて教師を騙そうとしている。三島への失望と※憤慨がこれまで馴染みのない、重苦しい情熱にかたちを変えて、涼子に手紙を綴らせた。読み返すうち、三島は信じるだろうと思えてきた。

折り畳んで封筒に入れたとき、窓硝子のかなたに深い夜空を感じた。風に乗って河の音が届いた。この手紙を書き終えた自分が、以前とは別

人のように感じられてくる。

台所へ行き、音をたてないように水を飲んだ。やるべきことをやったという居直りに似た気持の底にあまりにもうまく手紙が書けたことで、自分をあらためて見直すような、しかし意外にも苦い思いが残っている。自室に戻り、大の字に手足をひろげて横になってはみたものの、寝つくまでずいぶん時間がかかった。

翌朝、まだ誰も登校してこない時刻、涼子は手紙を松尾の机にしのばせた。だがその日、松尾は休んだ。自分の書いた封書が座るひとのいない机の中にぽつんと在ることで、涼子は終日落ち着かなかった。

次の日、松尾は手紙に目を通すと、授業が終わって帰ってゆく三島を追いかけて手渡した。その場で目を通した三島は天井を睨み溜息をつくと、千枝の病状について尋ねたという。結核か、あれは長いからな、と言うと口をへの字に曲げ、それきりだった。廊下の片隅ですれ違いざまそれだけのことを報告した松尾は小声で「うちの知っとる病気は結核だけ」とおかしそうに言ったあと、「あんな立派な手紙、初めて見た」と、⑦すべてが余りにもうまく運んだわりには寂しい目で付け加えたのだった。

※設問の都合で本文を一部省略・改変しています。

注

激昂……激しく怒ること。
胸郭……胸部を形成する骨格。
憤慨……ひどく腹を立てること。

【問一】傍線部①「すみませんのひとこと以外依怙地なまでに発しなかった松尾」とありますが、松尾が「すみません」以外に何も言わなかったのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　自分の話を聞こうとしないだけでなく、自分がうその手紙を書いたと邪推までする三島の態度に腹が立ち、言葉につまってしまったから。

イ　本当に母親が書いたのだが、大人が書いたとは思えない文面なのも事実で、また三島が自分を理解できる人間だとも思えなかったから。

ウ　三島に厳しく責められていることを誰かに見られるのではないかと気になり、周囲の人に気づかれる前に話を終えたかったから。

エ　顔を真っ赤にして怒っている三島の様子がこっけいに思え、うその手紙に対する三島の反応を楽しんでいることを隠したかったから。

オ　三島が自分の母親に手紙を書いたことを涼子に知られたのが恥ずかしく、話を続けてさらに家庭の事情を知られるのが嫌だったから。

【問二】傍線部②「三島の顔を引っぱり出し、そっと触ってみる」について、次の問に答えなさい。

(1)　この部分に用いられている表現技法として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　擬人法　イ　隠喩　ウ　直喩　エ　対句法　オ　倒置法

(2)　このときの涼子についての説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　三島の表面だけを見てあこがれていた自分の浅はかさに気づき、今ではすっかり好意を失ってしまったことを悟っている。

イ　三島が生徒の気持ちをふみにじる人間だと知った今、今後は三島との関わりに十分気をつけなければならないと肝に銘じている。

ウ　感情に流されないように努めながら心の中に三島の顔を思い浮かべ、自分がまだ三島に魅かれているのかどうかを確認している。

エ　相手を深く知ってから好意を持つのが本当の恋愛であり、そのことを知ることができるまでに成長できたことを喜んでいる。

オ　三島に対して幻滅すると同時に、三島の表情まで悪意のあるものとしかとらえられなくなっている自分に気づいている。

【問三】傍線部③「暗い森をくぐって夜明けの山頂に立ったような心地」とありますが、このときの涼子の様子の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　苦しい状況に立たされている松尾を救ってやりたいとこれまで悩んできたが、三島と松尾の衝突をきっかけにようやく自分が関われる機会を見つけたことを喜び、晴れ晴れとした気持ちになっている。

イ　表面的な魅力にたやすく恋してしまう自分のおろかさに嫌気がさし、また松尾の恵まれない境遇を思って気持ちが沈んでいたが、それも振り切って明るく気持ちを切り替えていこうとしている。

ウ　人の気持ちを理解しない三島にこれまでも不満を持っていたが、松尾のために自分ができることをはっきりと見つけた今、自分の考えはどんなことでも主張していこうと気持ちを奮い立たせている。

エ　松尾の抱える状況や三島の人柄など、これまでよく見えなかった事実を知ったことで、三島へのあこがれに心を惑わす状態から抜け出すと同時に、自分の意志で物事に向き合う強さを持つようになっている。

オ　どうしたら松尾の心を開かせることができるのか、これまでわからなかったが、松尾が家庭の状況を詳しく打ち明けてくれたことで、松尾とより親しい関係が結べるという希望が持てるようになっている。

【問四】傍線部④「特にあのひとの耳に入ったら、あんた、ただじゃすまないよ」、⑤「あのひとだけには、知らせとうない」について、次の問に答えなさい。

(1)　「あのひと」とは誰のことですか。その人物として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　涼子の父親　　イ　涼子の母親　　ウ　松尾の父親
エ　松尾の母親　　オ　三島

(2)　波線部A～Dは、傍線部④、⑤それぞれの言葉から涼子が感じ取ったことを比喩的に表現した箇所です。どちらの言葉から感じ取ったことかを分類し、④または⑤の番号を記入しなさい。

【問五】空欄［Ⅰ］、［Ⅱ］にあてはまる漢字を、それぞれ一字で答えなさい。

【問六】傍線部⑥「胸の内側に線香の火でも押し当てられたような痛みを覚えた」とありますが、この表現から読み取れる内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　松尾の悲しみの深さは確かに涼子の心に届いているのだが、松尾の苦しみの全てを理解してやれないことを涼子は悲しく思っている。

イ　軽々しい正義感で松尾を救おうとしていたが、松尾の辛さを理解していないことを責められて、自分の考えの甘さを苦々しく思っている。

ウ　自分の苦しみが誰にも理解されないことを怒っている松尾の気持ちが涼子に伝わり、松尾の境遇に涼子も改めて腹を立てている。

エ　誰にも知られたくない秘密を抱えながら生きている松尾の苦しみを思い、その秘密を知ってしまった自分の責任を改めて感じている。

オ　これまでの生活の中では知るはずもない、生きる苦しみというものを松尾に教えられ、涼子は新たな発見に胸をときめかせている。

【問七】涼子が書いた手紙の空欄［Ⅲ］には、季節のあいさつなどを省いて本文から書き始めるときに用いる語が入ります。入る語として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　謹啓　　イ　拝啓　　ウ　草々　　エ　敬具　　オ　前略

【問八】傍線部⑦「すべてが余りにもうまく運んだわりには寂しい目で付け加えたのだった」とありますが、このときの松尾の心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　三島に対して期待することはないようにふるまっていた松尾だが、本当は三島に心配されたかったのであり、自分の思っていた以上に家庭の状況に踏み込んでくれなかったことを寂しく思っている。

イ　自分の追いつめられた状況を解決するために、自分のあわれな境遇を人に打ち明けて助けてもらうしかなかった自分と、肝心なところでも自分を救ってくれない母親を情けなく思っている。

ウ　酒で心身がむしばまれてろくな文字も書けない母親をあわれに思うと同時に、涼子が書いたような立派な手紙を書く母親を持たない

自分の境遇を寂しく思っている。

エ　三島が涼子の手紙を信用したということは、松尾の母親が実際に書いた手紙は信頼がおけないものだということになり、母親そのものが否定されてしまうことを悲しく思っている。

オ　三島を騙すのであれば自分の力で騙して三島の鼻を明かしたかったのに、自分では立派な手紙を書く力もなければ、病気の知識もないのが恥ずかしく、結局涼子にかなわないことを悔しく思っている。

【問九】本文の表現の特徴を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　松尾の描写は涼子にとらえられる範囲でしか描かれておらず、誰にも理解されない松尾の苦しみがかえって浮き彫りになっている。

イ　涼子の描写は常にくわしく描かれており、悩み苦しむ涼子を支え、応援していくような読み方を読者に促す効果がある。

ウ　母親の描写は松尾の言葉からしか描かれず、涼子の想像を超える苦しみを松尾に与える冷たい人物として、存在感が強調されている。

エ　三島の描写は涼子の視点から感情的に描かれており、涼子が三島からいかに強い影響を受けていたかが強調されている。

オ　涼子が代わりに書いた手紙はいかにも大人らしく、涼子が困ったときにはしっかり支える家族がいることをほのめかしている。

三　次の文章を読んで後の問に答えなさい。

【原文】

※岩鼻やここにもひとり月の客

※先師※上洛の時、※去来曰く「※①酒堂はこの句を、月の猿、と申し侍れど、予は、客勝りなん、と申す。①いかが侍るや」。

先師曰く「猿とは何事ぞ。汝、この句をいかに思ひて作せるや」。

去来曰く「明月に乗じ山野吟歩し、A侍るに岩頭また一人の※騒客を見付けたる」とB申す。

先師曰く「ここにもひとり月の客と、己と名乗り出づらんこそ、幾ばくの風流ならん。ただ自称の句となすべし。この句は我も珍重して、※笈の小文に書き入れける」となん。

予が趣向は、なほ②二、三等もくだり侍りなん。

【現代語訳】

岩鼻やここにもひとり月の客

先師が京に上られた時、私は「酒堂はこの句の下五を、月の猿、とするのがよいと申しますが、私は、月の客、がまさっていようと申しました。いかがでしょうか」と尋ねた。

先師は「猿とは何事だ。お前はこの句をどう考えて作ったのか」と反問された。

私は「明月にそそのかされて、句を案じながら山野を歩いていますと、岩の端に一人の風流人がいるのを見て詠んだのです」と申し上げる。

先師は「ここにもひとり月の客として私がいるよ、と月に対して名のり出たほうが、どれほど風流であるかもしれない。直接自分を詠んだ③自称の句とするのがよい。この句は私も珍重して、『④笈の小文』の中に書き入れておいた」といわれた。

私の趣向は先師の考えに比べるとやはり二、三等もおとっているようだ。

（栗山理一他　校注・訳『芭蕉文集　去来抄』による）

※設問の都合で本文を一部省略・改変しています。

注

岩鼻……岩の突端。

先師……亡くなった先生。（この文章が書かれた時点では死亡していた）

上洛……上京。京都に上ること。

去来・酒堂……人名。共に先師の弟子。

騒客……詩歌などをつくる風流人。

笈の小文……先師が自分と門人の優れた作品を選んで編集したもの。現存しない。

【問一】波線部A「侍る」、B「申す」の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　Aは現代語でいうところの謙譲語であり、Bは尊敬語にあたる表現である。

イ　A、B共に謙譲語であり、去来が目の前にいる先師に対して話している。

ウ　Aは現代語でいうところの尊敬語であり、Bは丁寧語にあたる表現である。

エ　Aは現代語でいうところの丁寧語であり、Bは謙譲語にあたる表現である。

オ　A、B共に丁寧語であり、去来が目の前にいる先師に対して話している。

【問二】去来が句を詠んだ当初の心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　月の夜、岩の下に何者かの影を発見した。人か猿かは判断できなかったが、月を愛(め)でる者たちを照らす冴えた月の光に胸を震わせた。

イ　月の夜、岩の端にもう一人の風流人を見つけてうれしかった。猿であるかどうかよりも、月を愛でる風雅な心意気に感じ入った。

ウ　月の夜、山野の帰り道を急いでいたら、偶然たたずんでいる猿を見かけた。人間のように月を鑑賞する動物もいるのかと感心した。

エ　月の夜、目的もなく山野を散策すると、自分同様感傷にひたる人物を発見した。さながら月に鳴く猿のようであると思った。

オ　月の夜、歩いていると月を眺める風流人を発見した。おそらく猿であろうが、花鳥風月の鑑賞を人知れず行う孤独な姿に身震いした。

【問三】去来が詠んだ句と同じ切れを持つ句として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　木の芽してあはれ此世(このよ)にかへる木よ　　村上鬼城

イ　万緑(ばんりょく)の中や吾子(あこ)の歯生(はは)へ初むる　　中村草田男

ウ　むち鳴らす馬車のほこりや麦の秋　　夏目漱石

エ　どの子にも涼しく風の吹く日かな　　飯田龍太

オ　花火上がるはじめの音は静かなり　　星野立子

【問四】去来が詠んだ句の季語は「月」ですが、同じ季節を表す季語を含む句として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　向日葵(ひまわり)の大声で立つ枯れて尚　　秋元不死男

イ　やせ蛙(がえる)負けるな一茶これにあり　　小林一茶

ウ　をととひの糸瓜(へちま)の水も取らざりき　　正岡子規

エ　遠山に日の当たりたる枯野(かれの)かな　　高浜虚子

オ　咳(せき)の子のなぞなぞ遊びきりもなや　　中村汀女

【問五】傍線部①「いかが侍るや」と尋ねた時の作者の心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　自分の意見の方が良いと思ってはいるが、先師はどのような考えを持っているのか、ひとつお聞かせ願いたい。

イ　酒堂の意見より自分の意見の方が勝っていると思うが、酒堂を黙らせる根拠を考えていただきたい。

ウ　自分の意見と、酒堂の意見のどちらが優れているかわからないので、どちらが正しいか判断してもらいたい。

エ　酒堂の意見も自分の意見も説得力に欠けるので、先師の斬新な意見で、うまく場をまとめていただきたい。

オ　作者である自分の意見が優先されるべきだと思うが、酒堂の発言の真意を想像してもらいたい。

【問六】傍線部②「二、三等もくだり侍り」とありますが、何に対して「くだり侍り」と言っていますか。**現代語訳中**から五文字以上七文字以内で抜き出して答えなさい。

【問七】傍線部③「自称の句」とありますが、どのような行為をすることによって「自称の句」となるのですか。その行為の内容が最もよく分かる表現を**原文中**から九文字で抜き出して答えなさい。

【問八】傍線部④「笈の小文」の作者として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　松尾芭蕉　　イ　兼好法師　　ウ　近松門左衛門
エ　井原西鶴　　オ　鴨長明

【問九】去来が詠んだ句の先師の解釈として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　去来の作品にしておくのはもったいないので、自分の作品として珍重したい句である。
イ　月の客の正体を最後に種明かしするという趣向の、推理性に富んだ句である。
ウ　誰かいると思ったら、それは自分の分身であったという幻想的風味の句である。
エ　月の客を猿とすると、風流ではなくなるので、慎重に言葉を選ばなくてはいけない句である。
オ　見たことを詠んだのではなく、実は詠んだ自分自身のことを表現した内容の句である。

（問題は以上です）

国語

解答用紙

一

問一	問二	問四	問八	問九
Ⅰ			初め	
Ⅱ	問三 第 段落	問五		問十
Ⅲ		問六	終わり	
		問七		

二

問一	問二	問四	問五	問六
	(1)	(1)	Ⅰ	
問二	(1)	(2)		問七
(2)		A		
問三		B	Ⅱ	問八
		C		問九
		D		

三

問一	問二	問三	問六	問七	問八
問二		問四			問九
		問五			

氏名
受験番号